



(大阪東南部・桜井)

奈良・上宮遺跡 かみや

- 1 所在地 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺南三丁目
- 2 調査期間 第一四次調査 二〇〇〇年(平12)一月～三月
- 3 発掘機関 斑鳩町教育委員会
- 4 調査担当者 荒木浩司
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上宮遺跡は従来の調査で、奈良時代の掘立柱建物群が検出されており、建物の規模や配置、出土遺物などから、『続日本紀』神護景雲元年(七六七)四月乙巳条などに見える称徳天皇の行宮「飽浪宮」の有力な推定地となっている。また、聖徳太子が晩年を過ごしたといわれる「葦垣宮」の跡を寺にした伝承をもつ成福寺が遺跡の南側にあり、当該期の土器が多数出土するこ

とからも、この周辺に「葦垣宮」が存在した可能性は高い。

今回の調査は、範囲確認調査の一環として、昨年度に続き遺跡の西側の状況を明らかにするために、トレンチを五カ所設定した。主な遺構に古墳時代の斜行溝、古墳時代から奈良時代の南北溝などがある。木簡は第三トレンチの南北溝一から一点出土した。南北溝一は幅四m以上、深さは約一・五mである。木簡を含む遺物のほとんどが溝底付近の粗砂層から出土した。遺物は木簡の他、多数の土器、杭や流木などがある。土器の大半は六世紀後半の古墳時代のものであるが、七世紀後半から八世紀前半のものを少量含んでいる。

8 木簡の積文・内容

(1)

(6.6)×(1.4)×2 0.81

上下両端と左側面を欠く。日付を記していると考えられるが、欠損のため文字の判読が困難である。

上宮遺跡における木簡の出土は今回の調査が初めてであり、今後も継続される範囲確認調査で、さらに出土する可能性があり期待される。なお釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所の館野和己氏にご教示いただいた。

(荒木浩司)

